

北前船寄港地

日本遺産『外ノ浦』ガイドブック



「会津屋八右衛門氏頌徳碑」から外ノ浦湾を望む



松原浦(松原湾) 「会津屋八右衛門氏頌徳碑」から松原湾、浜田城址を望む



浜田藩の年貢米

益田方面の年貢米は、益田港から廻船で外ノ浦の鰯山番所で検査を受けて、松原浦へ陸揚げされていた。

廻船数：87艘



松原浦と外ノ浦 松原浦は浜田藩の直浦で、松原浦は遠浅で直接船を着岸できず、舢舨を利用して、益田方面からの米年貢を陸揚げしていた。

日本遺産「外ノ浦」遺跡配位置図





今津屋(会津屋)八右衛門の碑 江戸時代の回船問屋、浜田藩の御用商人として、「神福丸」の船頭今津屋(会津屋)清助の子。寛保10年生まれ。外国との密貿易が発覚して、斬首された。昭和10年に遺徳を顕彰するため現在地に「会津屋八右衛門氏顕徳碑」が建立された。

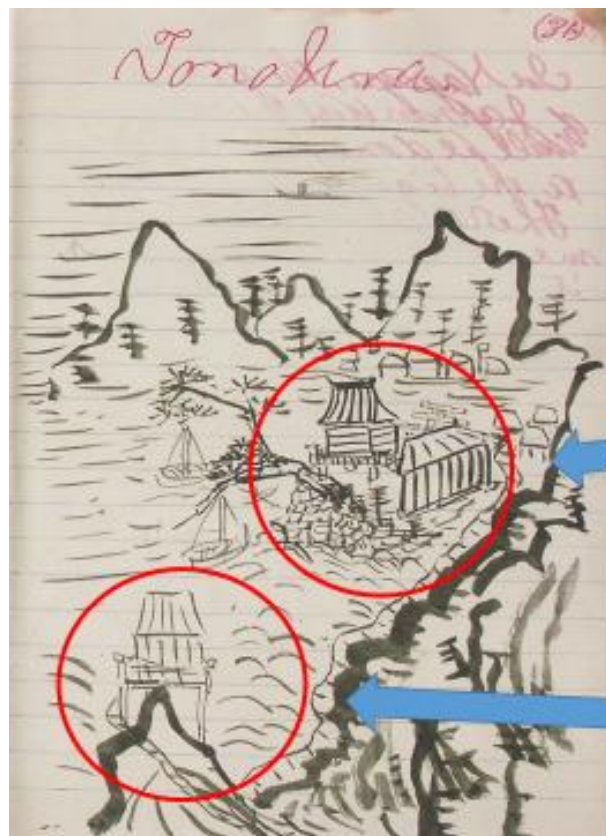


会津屋八右衛門氏頌徳碑





外ノ浦 天然の良港。外ノ浦の番所を経由して入出港していた。旧浅井村に属す田野尻の河口付近に津和野藩の蔵屋敷が享保16年(1731)に松原浦から移転され、津和野藩奥部(波佐組、久佐組、日貫組)から紙年貢の半紙の津出しが行われ、外ノ浦から紙が積みだされた。※田野尻→高津→青原・城下(公用紙・黄檗紙)



能海寛
が描いた
「外ノ浦」
(明治22年)

金刀比羅神社と米屋

鰯山番所跡



外ノ浦の外観 米屋、但馬屋は、金刀比羅神社を挟んで隣接している廻船問屋である。両船問屋は石見の鉄や米なども取り扱い、外ノ浦から北前船で積み出された。



金刀比羅神社 享保 3 年に海上安全を祈願して、四国金比羅権現と大物主神が合祀されこの地、外ノ浦に勧請された。明治 38 年に火災で焼失した。その後。明治 40 年に再建され今日に及んでいる。神社の左隣に廻船問屋の米屋があった。

金刀比羅神社建立由來記

当金比羅神社は、今から二七五年前正徳元年（一七一一年）松原浦心覺院二世寂蓮社主菅隆神和尚が外ノ浦に一庵を創建して松尾山と号し、海上安全を祈願したのが起源とされる。

享保三年（一七二八年）隆神和尚靈夢により、四国讃岐象頭山金毘羅権現（金毘羅摩掲魚夜叉大将）を勧請し、これを奉祀して金毘羅権現堂とした。

「金毘羅神（クンビラ）」は航海の安全を司る神として（インド語で「ワニ」の安全をいい、中国では龍神である）信仰を集めたのである。

当時は神仏習合の時代であり、金毘羅権現と大物主神が合祀されたものである。

開山和尚以来九代に亘って心覺院住職により奉仕されていたが明治元年の「神仏判然令」により「金刀比羅神社」となった。

現在神社前の丘陵には、歴代上人の数基の墓碑が往時を偲ばせている。

明治三十八年ごろの失火で拜殿とともに寄進された多くの奉納物が惜しくも焼失した。

現在の拜殿は翌年信者の寄進により名工どうたわれた波子の宮大工藤川長吉により建立されたが特に心礎を尽くした向拜の龍の彫刻は彼の傑作の一つといわれている。

拜殿には明治四十年六月申宮殿下（ナ正天皇）浜田に行宮のみぎり陸奥武官であった東京郷平八郎大將（元帥）の寄進になる筆跡を保存する。

外ノ浦の波が靜なるけふの日は

幾千代までも奇きにけり

外ノ浦は天恵の良港と風光明媚なたずまいに加え、自然が織りなす入江は航行にとても得がたい岸景で山陸十景の一つに数えられている。

大正末期ごろまで物資の交易に諸國船舶の交易船なかも北前船（別名弁財船）など多くの船が寄港していた。

昭和六十二年二月一日

金刀比羅神社

浜田内郷平八郎会



但馬屋 北前船の寄港地としての外ノ浦は、天然の良港であり、但馬屋は、船問屋を經營し石見産品を商いして、北前船を介して手広く商いを行っていた。写真の左側が旧但馬屋邸で、最盛期は但馬屋前の港には、右の帆船写真(清水邦行氏蔵)の様に多くの北前船が寄港していた。

外ノ浦湊 (赤丸内が金刀比羅神社)



楳々瀬幸氏提供



水ヶ谷 水ヶ谷の船着き場は、北前船の寄港地で水の補給港でもあった。



津和野藩の税制

請紙制：寛文4年(1664)に「米紙上納」制度が開始された。

享保16年(1731)に津和野藩の殿蔵が松原湊から外ノ浦・田野尻(現・生湯町)に移設された。

波佐組、久佐組、日貫組は、田野尻へ津出の夫米(1石に付3升5合)が課せられていた。

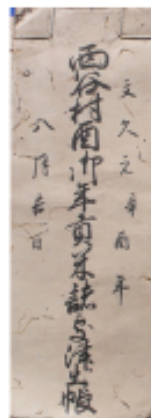
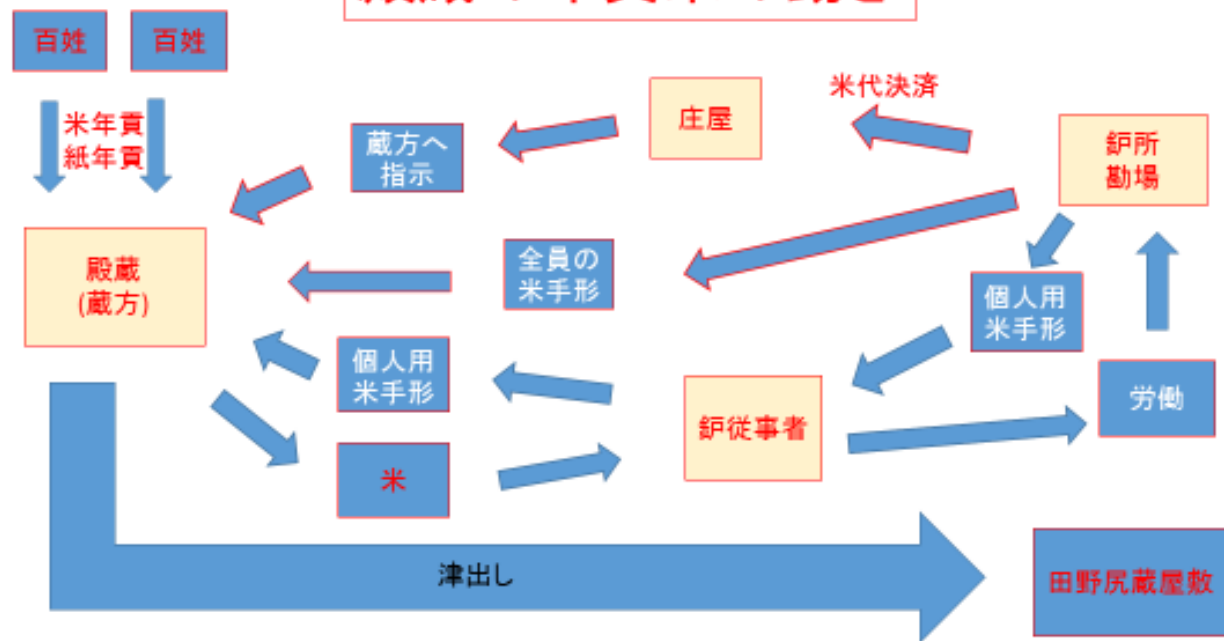
津和野藩の蔵屋敷の移転経緯

田野尻蔵屋敷 享保16年(1731)
坪数:400坪、タテ5間半、ヨコ26間

田野尻
津和野藩
蔵屋敷跡

田ノ尻 旧浅井村に属す田野尻の河口付近に津和野藩の蔵屋敷が享保 16 年(1731)に松原浦から移転され、津和野藩奥部(波佐組、久佐組、日貫組)から紙年貢の半紙の津出しが行われ、外ノ浦から紙が積みだされた。※田野尻→高津→青原・城下(公用紙・黄檗紙) 写真の中央奥が蔵屋敷の位置である。

殿蔵の年貢米の動き



年貢米の津出 波佐組(金城町)、久佐組(金城町)、日貫組(邑南町)の殿蔵から年貢米が田ノ尻の蔵屋敷へ馬の背で運ばれた。湊へ出すことを津出しと称した。右の大福帳は、年貢米の津出帳である。



外ノ浦湾(外ノ浦湊) 対岸に日和山方面を望む。



外ノ浦奥港 最盛期には、多くの廻船問屋が隣接していた。山の向うは、日本海である。水の補給(水ヶ浦)や風待ち港として、良港であった。



日和山方角石 北前船の出港前に船員が日和山に登り、方角石で日本海の風向きや潮の流れを確認した。右の写真は、方角石。



番所跡 江戸時代には、外ノ浦に入港する船舶を管理するために、番所(写真左端)が設けられていた。中央の高い場所に遠見番所があった。この山を総称して、番所山という。

浜田港(浜田浦)



浜田浦(浜田港)



序

「濱田港」とは懐かしき名なり、予が小學時代と獨學時代との記憶はすべて濱田にあり、幾時かの水泳に危く溺れ死せんとせし少年の想ひ出は、あはれ三十年の昔かな、瀬戸ヶ島の翠煙今も當時のまゝなりや、一丁田の丘に狐の火を見ながら片側町、夕暮に淋しく、すみし日の事も、夢の如く我が胸に残れり、

山陰の最低處たる石見國は、土瘠せて、人の心また石の如く堅きが多けれど、古は歌聖人麿と國聖雪舟とに万代不滅の足跡を遺させたり、陰陽山脈の險しき陸には、近世文明の波に洗はれざる上古素朴の風尚残り、北海の岸には到るところ天縱の奇景を有す、大正三年の今日、鉄道未だ此の國に入らざれども、何人かあつて、此の國を天下に推薦するものあらば日本に一名區を加ふると共に、予等郷当の喜ひいかばかりぞや、

濱田港は石見の首都として山陰道の最低處に貼せられたる眼目なり、此の町の前途に必ず繁栄あるべし、光輝きあるべし

大正三年五月

島村抱月識

大歳神社と抱月の碑文 栗島公園に位置する大歳神社の境内に抱月の「濱田港に寄せる」の碑文の掲示板があり、近くの宝福寺には、烈女お初の墓がある。

瀬戸ヶ島港



瀬戸ヶ島港



『外ノ浦ガイドブック』PDF版

発行者 波佐文化協会

マリン大橋 浜田道の駅からの眺望